



研究調査報告

軍都と図書館—国策紙芝居・坂出／西讃地域調査

大串 潤児

(非文字資料研究センター 客員研究員)

I. 坂出への道

国策紙芝居研究班の調査で四国を訪れるのは、これで何度目になるだろうか*¹。そこに確固とした系統的な調査計画（目的意識）はなく、情報があれば調査にゆくとというスタイルではあったけれども、調査を重ねるにつれて四国における紙芝居の保存状況についての知識が次第に蓄積されてきたことも事実だ。そして、こうした調査活動のなかで、検討すべき論点も自覚されていった。例えば、高松や徳島では翼賛会（翼賛壮年団）・隣組や寺院（保育所を含む）と紙芝居実演（所蔵）者の存在が、高松では都市のモダニズムと紙芝居文化の関係、高知では「漫画」の文化の蓄積（横山隆一などを輩出した）と地域社会の関係、といった問題が、これまでの調査のなかで検討すべき論点として浮上してきている。

今回の調査も、なかば偶然に把握された情報からスタートしている。主な調査地は香川県坂出市にある鎌田共済会郷土博物館（図書館）である*²。坂出は、かつては塩田がひろがる瀬戸内海水運の拠点として繁栄した西讃岐地域を代表する町場であった。また現在は瀬戸大橋をつかって岡山と結ぶ、四国の玄関口の一つでもある。近くには消費地として丸亀の城下町もある。

国策紙芝居と地域社会という観点からみれば、この地域では何よりも「軍隊と紙芝居」という問題を意識しなくてはならない。坂出の南西には、四国を代表する師団駐屯地、つまり「軍隊の街」＝善通寺がある。北西に足を延ばせば、国定教科書（国語 1918 年版）にも掲載された「軍国美談」－「一太郎やあい」の物語で著名な多度津もある。また、さらに西には、戦争末期の 1943（昭和 18）年に、水上機（水上偵察機）・飛行艇（二式大艇）搭乗員の訓練のために海軍航空隊が置かれた詫間の街がある。

こうした坂出・丸亀など西讃岐地域は、高松モダニズムの近郊に位置してその文化的影響圏にありつつ、同時に地域全域に軍事施設が分散しているという特徴がある。また、国定教科書の物語＝「軍国美談」の「素材」となった地域でもある。国策紙芝居研究にとっては、軍隊・教育・地域と、それぞれ必須のテーマを問いかけてくれる地域であった。私たちの調査も、そうしたテーマを意識して行われた。

調査は 2023 年 4 月 21～23 日に行われる。調査メ

ンバー（新垣夢乃・小山亮・大串）はそれぞれの仕事を おえ、坂出へ向かっている。瀬戸大橋は深夜に渡ることになったので、美しい瀬戸内海を眺めることはできなかった。

II. 「軍都」善通寺の面影

調査一日め（4 月 22 日）はまず善通寺市に向かった。陸上自衛隊第 14 旅団が駐屯する「自衛隊 善通寺駐屯地」、その敷地内にある駐屯地資料館、別名「乃木館」を訪ねるのが目的である。乃木館は、1898（明治 31）年 10 月、四国全域を管区とする第 11 師団が編成された際、その師団司令部として建てられたものである。乃木希典が初代師団長であったことから、その名を冠している。師団長執務室が復元保存されており、館内は旧軍関係の資料展示室となっている。

展示されていた『第十一師団歴史』全 3 巻（原本の複製製本版と思われる）を繰ってみたが、本書は基本的に編制・人事や「戦歴」（作戦行動の履歴）が叙述の中心となっていて、地域社会のなかでの軍隊の行動（軍事行政や普及事業を通じての地域とのかかわり）についての記述はほとんどなかった。師団史や聯隊史などの部隊史は膨大な刊行点数にのぼっているが、「戦歴」のみならず軍事行政や地域社会との関係にまで言及した部隊史はどれほどあるのだろうか。旧軍関係者による部隊史編さんの問題意識や叙述内容の限界をあらためて実感した。

というのは、私たちの研究グループにとって善通寺師団はとりわけ馴染みのある部隊の一つであったからである。すでにあちこちで言及している事柄だが、善通寺師



図1 旧善通寺第 11 師団司令部庁舎。

現在は「乃木館」として師団の歴史や市民から寄贈された軍隊ゆかりの品々を展示している。



図2 「旧陸軍第十一師団司令部之跡」碑。
1969年に建碑された。



図3 善通寺師団歩哨舎。
衛門（軍隊の正門）を警護する兵士が立っていたところ。

団では、紙芝居のもつ価値を重視し、その軍政（対住民対策や軍事思想の普及、兵士の慰安など）において紙芝居を活用していたことがわかっている^{*3}。また兵士が喜ぶ「近頃評判紙芝居番附」などは、類似の史料がないなかで後述する紙芝居作品の民衆レベルにおける受容の論理を考える貴重な記録の一つとなっている^{*4}。

しかし同時に、こうした研究の根拠となる記録は雑誌『紙芝居』掲載記事にほぼ限られており、また私たちの研究グループでも、他の師団・聯隊駐屯地における紙芝居文化の状況を総体として把握し、各「軍都」（都市）を比較しての検討が行われているわけではない^{*5}。

乃木館には、地域住民やかつての軍関係者からの寄贈品も展示されており、なかにはSPレコードなど興味深いものもなかったが、ここでも紙芝居史料は展示されていなかった。

西を我拝師山捨身ヶ嶽、南を金刀比羅宮につらなる大麻山に囲まれた善通寺の街並みはこじんまりとしたものであった^{*6}。市街地を歩くと部隊跡を示す石碑が多く建てられていて、「軍都」の面影を偲ばせる。JR 善通寺駅から駐屯地方面へのびる道路沿いにはこの街の繁栄を思



図4 善通寺郊外にある遊郭（航空写真）。
左側、周囲を田圃に囲まれ建物がたてこんでいる場所が遊郭だという。現状は確認できなかった。善通寺市立郷土館展示パネルより。

わせる商家やモダンな結構の写真館などが遺されている。「師団一」の銘柄を醸造・販売していた瀬川酒店も現存する。しばらく歩くと、1922（大正11）年、陸軍特別大演習と皇太子（のちの昭和天皇）行幸にあわせて開通した市電・琴平参宮電鉄（現在のJR土讃線と並走）が走っていた街道にぶつかる。

かつての師団衛戍地は、自衛隊駐屯地のほか、市役所や市民会館、四国学院大学のキャンパスになっていた。それぞれに、兵器庫（自衛隊駐屯地倉庫）や第11師団騎兵隊兵舎（四国学院大学校舎）などの建築物も保存されている。偕行社（重要文化財）は、戦後、地区検察局や市役所、公民館、郷土博物館などに活用されたのち2004～07年までの復元工事によって住時のすがたをよみがえらせた。現在はイベント会場としても活用されている。

善通寺市立郷土館を訪ねたが、たまたま館長さんが館内におられ、近代善通寺地域の様子について詳しいお話を聞くことができた。館長さんは1931（昭和6）年生れ、駐屯地北部に広がる練兵場の近くに暮らしていたという。館内にパネル展示されていた善通寺周辺地域の航空写真（大正期の撮影という）について詳細な解説を聞き、とくに師団駐屯地西北、筆野山麓にあった遊郭の場所（写真上で）教えていただいた。

Ⅲ. 地域図書館と紙芝居

お昼過ぎ、坂出駅近くに広大な敷地を占める鎌田醸造グループ（醤油醸造業）の「鎌田ミュージアム」の一角にある鎌田共済会郷土博物館を訪ねた。建設時に植えら



図5 鎌田共済会郷土博物館 3階へ向かう階段。
潇洒なデザインが印象的である。



図6 香風園。
香風園は坂出の実業家・政治家鎌田勝太郎が1910（明治43）年に完成させた鎌田家別邸。回遊式庭園をそなえ、また飯野山（讃岐富士）を借景に取り入れている。



れた立派な「ソテツ」の大木がとても印象的である。すぐ近くには「鎌田醤油」工場や、回遊式庭園をもつ旧鎌田家別邸（香風園）がある*7。

今回の調査・閲覧にあたっては郷土博物館学芸員の齊藤祐司さんにお世話になった。齊藤さんには、1922年建設の郷土博物館建物（旧図書館）内部や、鎌田共済会を設立した坂出の産業人・名望家である鎌田勝太郎についての展示もご案内いただき、あわせて鎌田共済会（博物館・図書館）の歴史を教えていただいた。

さて、調査対象とした鎌田共済会郷土博物館（図書館）所蔵の史料は次の二つの簿冊である。

『昭和十八年一月起 紙芝居感想録綴』鎌田共済会図書館

『昭和十八年一月起 教育紙芝居貸出簿』鎌田共済会図書館*8

いずれも図書館が作成した史料だが、蔵書目録をはじめ図書館関係の記録が未整理の現在、これらに加えてさらにどのような紙芝居関係の記録が所蔵されているかについては不明である。また図書館が貸し出した紙芝居作品の現物そのものは所蔵していないようである。ただ、「教育紙芝居」とカテゴライズされた鎌田共済会図書館所蔵紙芝居の「全体像」は、『貸出簿』記載の作品を調べることである程度のことかわかる。『貸出簿』は、紙芝居現物が存在しないなか、地域における紙芝居コレクションの「総体」を知る貴重な史料ということになるだろう。貸出先は、坂出周辺農村の青年学校、国民学校などが多いが、部落会・隣組常会や婦人会宛のものもある。また教会や工場、「子ども常会」など興味深い貸出先も多い。図書館では貸出と同時に実演の日時・作品、感想を書き込む「報告書」様式が渡され、実演者の感想や、紙芝居に対する観衆の反応、観覧人数が記録されることになる*9。

私たちの研究グループでは、これまでいくつかの公共図書館や私立図書館における紙芝居所蔵作品の調査を行ってきた（滋賀県愛知郡愛荘町立図書館「びんてまり館」・岐阜県瑞浪市民図書館や人形劇の図書館など）。しかし、戦前から存在していた図書館を対象に、図書館活動そのものが紙芝居文化運動にどのような役割を果たしていたのか、という観点で問題を深めてきたわけではない。

紙芝居は確かに「街頭紙芝居」をも一つの基礎として発展してきた大衆文化（大衆メディア）である。同時にまた「教育紙芝居」という名称に象徴されるように、「教育」（知的啓蒙）役割への期待をも基礎として発展・普及、社会的地位を上昇させてきた文化である。とすると、紙芝居を受容する人びとの教養それ自体の内容が問題になるだろう。紙芝居には国定教科書に取材した作品も多いが、こうした側面からも紙芝居が提示する「物

語」は、国定教科書掲載の物語と対応しており、子どもに「期待される知的水準」（教養）を検討するといった論点を無視することはできない。こうした学校教育における「教育」と、文化状況をつなぐ接点に、地域における図書館活動がある。そしてさらに積極的には、地域の図書館活動を軸に、地域民衆の教養構造（あるいは知的意識の構造）そのものを問題にしなければならないだろう。当然、そうした教養構造の形成にあたっては、モダニズムの文化的影響、在来の民衆文化（講談・浪花節や民俗的な芸能の文化表象）、そして学校教育といった、いくつかの力学がある。「通俗教育」（あるいは公民教育）論ともかかわって図書館（あるいは読書運動）はこうした教養形成の力学の重要な一つであろうと思われる。

鎌田共済会図書館の活動をふまえて構想された以上の論点を、具体的な「ひと」の活動や意識（紙芝居実演や観衆の問題）といった問題に置き換えてみると次のようになるだろう。

紙芝居研究の方法論を深めていくために、紙芝居作品はどのように戦時期民衆に受容されたのか（楽しまれたのか）、という論点を明らかにすることが決定的に大事になっている。このことは、私たち研究グループの共通理解になりつつあるが、こうした方法論的な論点を構成する個々の問題群として、1）実演者の社会的地位やその思想（伝記的研究）、2）上演場所の社会史的意味の読解をふまえた民衆行動（反応）の解析、といった問題が考えられる。1）についてはすでにいくつかの問題提起があり*10、また2）についても広く戦時地域文化論（文化状況と構造）を基礎にしての読み解きが進んでいる。また私たちの史料調査の過程でも、徳島県立文書館所蔵史料や各務原市歴史民俗資料館所蔵史料に、実演講習における実演者の様子を記録したものや、個人のものではあるが紙芝居実演の「感想録」を見いだしてきている*11。

鎌田共済会図書館の作成による紙芝居『貸出簿』および『感想録綴』は、私たちの研究グループのこうした蓄積にとってたいへん重要な史料である。図書館で紙芝居を借り出し、地域にもどって実演した人びとは、後述の藤田溪山や小野木紫風、また掛川の篤志家・浦上喜平といった地域文化指導者層に比較して、ある意味でより民衆に近接した存在である。史料に綴られた感想の記録は、



図7 調査風景。

彼・彼女らによって、民衆に近接した場所で作製された「感想録」である。またこの史料は、より直截に紙芝居に対する民衆反応が記録されている可能性がある史料でもある。こうした記録はこれまでの調査ではほとんど発見されておらず、その意味で今回の調査は紙芝居研究にとっても大きな「成果」を提供するものとなったのである。

今後、私たちの研究グループでは詳細な読解作業を実施していく予定であり、ある程度まとまった段階で成果をお示し出来ればと考えている。坂出の夜は、瀬戸内の魚や貝、讃岐の旬の筍を肴に、史料読解・研究の構想を練りあげる有意義な時間となった。

IV. 方法の問題—地域文化人と街頭紙芝居業者の接点、軍隊と生活の拮抗のなかの紙芝居

史料撮影が思いのほか順調に進んだため調査二日目（4月23日）は関連する資料館や史跡を訪ねることにした。瀬戸内海歴史民俗資料館は、瀬戸内を見下ろす高台に作られ、「水軍」（海賊）の城郭を思わせる建物であり、海の民の暮らしや生業を詳細に展示したすぐれた博物館であった。ここには大政翼賛会支部や村常会史料をふくむ「大山家文書」があり、紙芝居実演の最末端を知ることができるであろう史料群であったが、突然の訪問でもあり残念ながら文書は閲覧することが出来なかった^{*12}。

「軍国美談」の物語（つまり表象）と、その舞台となった地域社会はどのような関係にあったのか。「一太郎やあい」の舞台、多度津は興味深い調査地域でもあったが、現在では何の手がかりも得られていない。「一太郎やあい」そのものも、国定教科書掲載の時期は短く、また国策紙芝居が盛んに出版される時期にあってもこの「軍国美談」に取材した作品は確認されていない^{*13}。

これまでの四国調査でも高松や高知などの地方都市モダニズムをどのように視野に入れるのか、という問題が意識されている。地方都市モダニズムと、いわば在地の民衆文化でもある街頭紙芝居とは、どのように「出逢う」のだろうか？

両者をつなぐ中間の媒介者の存在が重要になろう。私たちの研究グループでは、すでにそうした人物として秋田・土崎町の藤田溪山に注目してきている。藤田は地域の街頭紙芝居業者ともつきあいがあり、また自身、紙芝居を創作・実演もしたが、紙芝居実演のいわば最末端にあった役場吏員や郵便局員などの官公吏、社会団体（産業組合・農会など）員とは若干社会的性格が異なり、いわば地域の文化的サブリーダーである。こうした人物と街頭紙芝居業者の出逢いという論点の具体像が次第に明確になりつつある。鎌田共済会図書館の紙芝居貸出事業に参加して行った人びとは、より民衆に近い存在でもあろうが、この地域における地域の文化的サブリーダーの

人物像はいまだに明確ではない。

こうしたなか、たとえば雑誌『教育紙芝居』第2巻第3号（1939年3月）に紹介されている高松高等商業学校助教授・岡武雄と「紙芝居の町のおちさん」・瀧侃二の関係は興味深い事例だろう。高商助教授という高学歴かつモダニズム文化の担い手でもあったであろう人物が、地域における日本教育紙芝居協会支部設立の中心になっているのだが、彼（岡）が支部設置にあたって協力を依頼した人物が瀧であった。瀧を「街頭紙芝居業者」と言えるのか、必ずしも明らかではないのだが、彼は小学校や中等学校、さらに愛国婦人会・国防婦人会・青年団などにむけて紙芝居巡回公演を行っている「篤志家」であった。国策紙芝居には「独創的な説明を加へ」（実演＝「語り」の独創性！）、さらに「絵心」もあつて「軍馬や勇士の美談」の創作にも取りくんでいると報じられている（「巷に揮う紙芝居の教鞭」前掲『教育紙芝居』第2巻第3号）。岡や瀧については、紙芝居実践活動はもとより、そもそも彼らの人物像すらその解明は今後の課題となっている。高松モダニズムと民衆文化、その中間媒介者としての在地文化人（地域の文化的サブリーダー）と街頭紙芝居業者の「結合」、そこに文化実践のテーマとして存在している「軍馬や勇士の美談」（いわゆる「軍国美談」）と地域の軍隊社会、そうした複合的な視点の組み合わせのなかに鎌田共済会図書館の紙芝居貸出活動をおいてみることも興味深い問題の発見につながるかもしれない。

讃岐平野をぬけ半島部にある詫間の街に向かった。詫間海軍航空隊は先述のとおり戦争末期に編制され、設置された部隊である。半島の突端にある航空隊基地跡は、

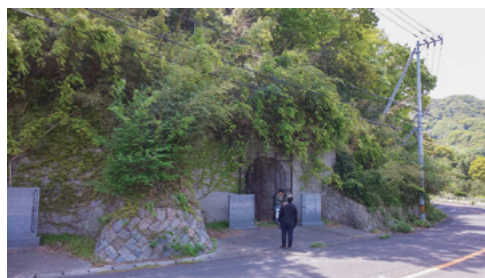


図8 詫間海軍航空隊防空壕跡。



図9 「詫間海軍航空隊記念碑」。
写真向かって右側には充実した解説パネルがおかれている。



図10 詫間海軍航空隊 水上機発進用滑走台。

詫間海軍航空隊は1943（昭和18）年に開隊。当初は水上機訓練のための部隊であったが、のちに沖縄戦に備えて飛行艇の基地となった。

現在、地元企業の工場と高等専門学校キャンパスになっていた。近くには記念碑もあり、また航空隊があった場所を見下ろすことができる山の中腹には、防空壕の遺構も残されている。今回の調査では見ることが出来なかったが、詫間町民俗資料館から詫間海軍航空隊記録編集委員会編『詫間海軍航空隊物語―戦後五〇年誌』同館、1997年刊行されている。また航空隊設置にあたっての住民たちの「強制移転」をめぐるのは、香田自治会編『奪われた「ふるさと」―あゝ詫間海軍航空隊』香田自治会、1994年といった興味深い文献もある。

地域末端の常会で紙芝居が活用されていたことは周知の事柄であるが、軍隊と直接向かい合い、さらに「強制移転」など軍隊との間に生活上の「矛盾」を抱えた集落の常会においては、果たしてどのように紙芝居が活用されていたのか。想像力は羽を広げて飛翔していくが、かつて大空を翔けた水上機や飛行艇が離水発進したカタパルト跡は何も語らず、波にあらわれるだけであった。

洗や各務原など航空隊―農村部の街場と軍事基地―をも調査した経験があるが、これらを総括的に論じることは出来ていない。また、近年さかんになっている「軍隊と地域社会」をめぐる研究においても、軍隊の文化政策、地域文化と軍隊などといった問題についてはほとんど検討が加えられていない。

- *6 普通寺市街地の概要と史跡については『みちくさ遍路 普通寺市88ヶ所めぐり』普通寺市、2021年が便利なガイドブックとなっている。
- *7 「鎌田ミュージアム」「郷土博物館（旧図書館）建物紹介」パンフレット。
- *8 表紙に別紙添付があり「左記御注意下さい 一、貸出ノ時感想用紙ヲ渡スコト 一、受取りノ時観覧人員ヲ貸出簿ニ記入ノコト 一、九・五・二四（印―野田）」とある。
- *9 前掲図録『ここに100年―そして未来へ』には鎌田共済会図書館による「郡内巡回文庫」「町内貸出文庫」や、1933（昭和8）年からつくられる一般を対象とした読書組合活動の概要が紹介されている。『鎌田共済会沿革略史』の序言で岡田唯吉は、「一般学徒および民衆のために読書の便を与え、あるいは講演の機をつくり、もつて通俗民衆の普及発達と、地方文化の振興開展に資せん」と図書館建設の理念を述べているが、こうした理念にもとづく活動の展開のなかに戦時紙芝居貸出の動きも位置づけることが出来ると思われる。そのうえで、「民衆のため」という思想がどのように戦時社会を支えてしまうのか（あるいは戦時体制との緊張感を維持しえたのか）は別途詳細な分析が必要になるだろう。戦時下の読書運動は大政翼賛会の地方翼賛文化運動でも注目されていた運動である。
- *10 たとえば『News-Letter』No.49 別冊「国策紙芝居 地域調査報告」、2023年3月でとりあげた藤田溪山（秋田土崎）や小野木紫風（各務原）といった人物など。
- *11 拙編『国策紙芝居―地域への視点、植民地の経験』御茶の水書房、2022年、松本和樹「国策紙芝居班各務原調査―役場吏員の活動にみる戦時下各務原地域の紙芝居活動」前掲『News-Letter』No.49 別冊。
- *12 「讃岐国大内郡水主村大山家文書」中に存在するが、同文書は現在香川県立ミュージアムの集中管轄になっており、事前の所定手続きが必要とのことであった。
- *13 いわゆる「軍国美談」のうちどのような作品（物語）が国定教科書掲載の「教材」となり、また紙芝居作品になっていくのか、こうした相関についての系統的な分析は私たちの研究グループによっても、いまだに果たされていない。とりあえず中内敏夫『軍国美談と教科書』岩波新書、1988年。

【追記】

2023年10月7日に開催された研究会での討論で、鎌田共済会郷土博物館学芸員・宮武尚美氏から鎌田共済会図書館所蔵紙芝居の入手経路について興味深い事実が紹介された。鎌田共済会図書館『昭和十九年度 図書館日誌』1944年4月2日条には「高松三越支店ニ紙芝居ヲ注文ス」との記述がある。本文でも指摘したように地域の紙芝居文化とモダニズムの相関は大きな課題であったが、紙芝居が三越支店（地域モダニズムの拠点！）を通じて流通していたことが確認できた。従来、紙芝居の販売経路・入手経路についてはよくわからないことが多かった。新聞販売店が窓口となっていた事例（京都府亀岡）や雑誌『紙芝居』など日本教育紙芝居協会を通じて個人が購入している事例（兵庫県出石町）、寺院組織（地域の仏教会）がまとめて購入し借覧・使用していた場合、などがわかっている。地域の百貨店が紙芝居購入（販路）の窓口になっていたことは今回判明した重要な事実関係の一つである。

【注】

- *1 これまでの四国調査については以下の報告を参照。森山優・大串潤児「姫路―高松―徳島 紙芝居調査報告」『News-Letter』No.42、2019年9月、原田広「国策紙芝居調査―四国（香川、高知）地区」『News-Letter』No.48、2022年9月。
- *2 鎌田共済会郷土博物館（図書館）の概要については宮武尚美氏執筆のコラムを参照してほしい。また（公財）鎌田共済会郷土博物館編『ここに100年―そして未来へ―鎌田共済会図書館・郷土博物館のあゆみ』鎌田共済会郷土博物館、2022年というすぐれた図録（2022年同名特別展図録）が刊行されている。
- *3 拙稿「軍隊と紙芝居」吉田裕編『戦争と軍隊の政治社会史』大月書店、2021年。
- *4 富永憲一「兵隊の喜ぶ紙芝居番附」『紙芝居』第7巻第4号、1944年4月。富永は普通寺第11師団報道部の軍人である。
- *5 いわゆる「軍都」つまり比較的規模の大きな地方都市における街頭紙芝居をふくめた紙芝居文化の実相と軍隊との関係についての検討は、私たちの研究グループでも大きな課題となっている。師団レベルでは旭川第七師団と旭川文化聯盟の活動の事例が比較的に知られているが、他の地域、例えば街頭紙芝居について民俗学の成果がある金沢においては金沢モダニズムとの関係での議論はほとんど行われていない。聯隊区司令部の文化政策と紙芝居（広く文化運動）との接点も秋田市・歩兵第17聯隊と秋田市の翼賛文化運動などわずかな事例が知られるのみである。私たちの研究グループでは、大